

インフィニティ
人生∞周目の精霊使い
無限の歴史で修行した元・凡人は世界を覆す

師走トオル



ファンタジア文庫

3016

イ シ フィ ニ ティ

人生∞ 周目の 精霊使い

無限の歴史で修行した元・凡人は世界を覆す

口絵・本文イラスト ミュルリア

遠くない未来の話

小さな孤児院があった。

廃村の外れに建てられたその孤児院は、少し前までほんの数人しか生活していない静かな場所だった。だがこのところ急激に住人が増え、子供の声の絶えない賑やかな村になりつつあった。

もつとも、人が急激に増えた理由を聞けば誰もが口籠もるだろう。戦争により、孤児が急増したからだ。

おまけに戦争は、孤児院に更なる危機を及ぼそうとしていた。すぐ近くの森に、敗残兵の集団が迫っていたのだ。



「おい、見つけたぞ。あれがまだ人がいるって孤児院だ」

彼らは数か月前、この地に侵攻したロヴェール帝国の兵士だった。

強力無比と謳われる帝国軍だったが、本隊はあえなく壊滅。生き延びた兵士たちの多く

は帝国へ逃げ帰ったが、この異国の地に残る選択をした兵士たちも少なくなかった。

略奪のためである。

「こいつあい。あれだけ女子供がいるんだ、食い物もかなりあるはずだぜ」

「おまえら、ガキは奴隷にするんだからな！ この間見つけたガキみたいに使い潰すんじゃないぞ！」

「へっへっへ、ようは潰さなきゃいいんだろ？ 今度は気をつけるさ」

帝国は長い戦争の最中にあり、兵站と士気を維持し、かつ敵国に被害を与える略奪は、軍上層部が認めた正当な行為であった。

だが民衆に暴力を振るい、金品や食糧を強奪し、婦女子を奴隷として連れ帰るという欲望に忠実な行為を繰り返していれば、略奪そのものが目的となる兵士も増えてくる。

ただでさえ長い戦争で帝国の経済状況は悪化している。平民の生活は圧迫されており、故郷へ帰ってもロクな職がないとなれば、他国で賊紛いの行為にふけっている方がよほどマシだった。

とはいえ、この辺りの土地からはすでに多くの住民が逃げ出しており、あらかた略奪された後だ。彼らも四日前、たまたま避難民の群れを見つけて略奪の限りを尽くせたものの、それ以降はまったく幸運に恵まれなかった。昨日からは食べ物すらロクに口にできておら

ず、だからこそ人が残っている孤児院を発見できたことに狂喜した。

彼らは意気揚々と森を出て孤児院に近づいた。その数は五〇人近くにのぼる。女子供相手に警戒の必要はまったくなかった。

「しかしよ、將軍がいた本隊がやられたのつてこの辺りじゃなかったか？」

兵士の一人が、ふと抱いた疑問を口にする。

「知らねえよ。そうだとすると、敵がいる様子はどこにもねえだろ」

「でもよ。この辺りに残ってる農民なんざもつ一人もいないつてのに、なんであの孤児院にだけはあれだけ人が残ってるんだ？」

「ガキを数十人も連れて逃げられなかったんだらうよ。そんなに心配ならてめえはこの場に残るんだな」

「い、いやそんなのゴメンだぜ！」

村の周辺に敵などいるはずがない。心配性な兵士の疑問を、残る全員が笑い飛ばした。

「おまえたち、そこで止まれ」

彼らの前に、一人の男が立ち塞がったのはそんなときだった。

年齢は二〇代前半といったところか。普段から鍛えているのか、体格がよく、目つきも鋭い。特に印象的だったのは、やたらと落ち着いているところだ。五〇人近い敵国の兵士たちを前に、微塵も動揺している様子が無い。

「なんだてめえは!？」

「この先の孤児院の者だ。おまえたち、見たところ帝国の兵士のような。今すぐ立ち去れ、この先は兵士の立ち入りを禁止している」

兵士たちは一瞬呆気にと取られた後、大声で笑い出した。

「馬鹿かてめーは！　ここまで来て『はいそうですか』と帰るわけねーだろ！」

「いやいいじゃねえか、帰ってやろうぜ。女子供と食い物を全部頂戴した後にな！」

「孤児院にや美人のシスターもいるつて聞いたぜ。ガキは持ち帰るとして、シスターはその場で可愛がつて——」

最後にそう言いかけた兵士の一人は、なぜかそこで発言を中断した。何かが潰れるような鈍い音を合図に。

どうしたのか——と仲間たちが反射的に視線を向け、そして異常に気付いた。その兵士の頭に大きな岩がめりこんでおり、顔が潰れていたからだ。顔がなければ声など出せるわけもない。

一瞬の思考の後、彼らはようやく仲間が殺されたことに気付いた。

「う、うわあああああ!? テッド!? テッドが殺されたぞ!」

「気をつけろ! こいつ精霊使いだ! 土の精霊を呼び出しやがった!」

その指摘が正しいことを証明するように、男の傍に不可思議な生物——土の精霊ノームが召喚されていた。

精霊使い、あるいは召喚士。異界に存在する精霊と契約を結び、万物を操るといふ魔法使いのような存在だ。

「子供たちとシスターをどうすると言ったか? おまえたち」

男が静かな声で言った。決して大きな声ではなかったにもかかわらず、兵士たちは一瞬声を失った。男の全身から滲み出る殺気に圧倒されたからだ。この男には手を出すべきではないと、本能が告げている。

だが、相手はたった一人。しかも数日ぶりの獲物がそのすぐ向こうにある。兵士たちは得体の知れぬ恐怖をただの弱気と振り払った。

「こ、殺せ! 召喚術を使われる前に殺せば済む!」

「相手はたった一人だ、女と食い物が待ってるぞ!」

兵士たちは自分たちを鼓舞するように声を荒らげると、武器を構えて男に接近しようと

した。一人対五〇人だ、あと一人二人は殺されるかもしれないが、結果は見えている。

だが精霊使いは微塵も動揺することなく、召喚術の行使を続けた。

「出でよ、ノームたち」

次の瞬間、兵士たちは瞠目して足を止めざるを得なかった。

「な、なんだあの数は!？」

ただの兵士であった彼らも、同じ種類の精霊を同時に召喚することは極めて難しいと聞いたことはあった。ノームを三体も同時に召喚できれば、もはや天才の域だと。

にもかかわらず——その男が呼び出したノームの数は、実に一〇〇体にものぼった。しかもその一〇〇体が一斉に大地を操り、地面の中から一抱えほどもある岩を次々空中に浮かび上がらせたのだ。

一〇〇体のノームと一〇〇個の岩が浮かんでいる光景は、いっそ壮大でさえあった。兵士たちにとって問題があるとすれば、一〇〇個の岩が今後どのような軌道を描くか容易に想像がついたことである。

「多くの子供たちから母親と父親を奪っておきながら、さらに暴力を振るい奴隷にしよう

など、想像するだけでも虫酸^{むしす}が走る。面倒だ、死ぬ」

精霊使いがそう言い終えると同時に、雨が降った。ただし、水滴ではない、岩の雨だ。反撃の余地も、防ぐ方法もない。岩が頭に直撃した兵士は痛みを感じる時間が短かった分、まだ幸運だった。多くの兵士たちは手足を潰され、その激痛に悲鳴を上げることしかできなかった。彼らは逃げ惑い、仲間の体すら盾にしてひたすら降り注ぐ岩の雨から身を守るうとした。

しかも、彼らに降り注いだ岩は一〇〇個だけではなかった。間髪入れず、第二射、第三射が降り注ぐ。一人として生き残ることすらできないよう、念入りに。

命乞いをする声すら、岩の叩きつけられる轟音^{ごうおん}にかき消された。

間もなく五〇人の兵士の存在は、文字通り地上から消え去ることとなる。



「やれやれ、懲りない連中だ」

俺は五〇人の兵士すべてが岩の下で押し潰されたのを念入りに確認した。続いてノームたちに穴を掘らせ、埋葬する。

ここから孤児院までは少々距離があるが、ここまで遊びに来てしまう子供も皆無ではな

い。もし無残に殺された死体を見つければ、両親のことを思い出して泣くだろう。そういつた泣き声に今の俺は耐えられる自信がない。

入念な後片付けが終わった後、ようやく俺は孤児院に戻った。

「あ、ジレットだー」

「ほんとだ、ジレットだー」

庭で遊んでいた孤児たちが、俺を見つけて寄ってくる。

思わずホツとする光景だ。親を失った子供たちが、今日も笑顔を失わずに済んだからだ。夜が来る度、母を求めて泣く子がいるとはいえ。

「どうしたの？ お外でなにしてたのー？」

彼らの追及は徹底的だ。とりあえずウソではない答えを口にする。

「肥料を撒^まいてきたんだ。近いうちに畑を作ろうと思ってる」

「ひりよう？ ひりようってなに？」

「ねえねえ、畑でなに作るのー？」

「それより遊ぼうよ。またお水一杯出してえー」

キリがない。とりあえず俺は水の精霊ウンディーネを数体呼び出し、空に水を撒いた。大きな虹ができあがり、子供たちが歓声を上げる。

「こらっ、ジレットはお仕事で忙しいって言ってるでしょ！ 邪魔しちゃダメ！」

「わー、シスターだ！ 逃げるおー！」

そのときだ。修道服に身を包んだ若い聖女が一喝すると、子供たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ出していく。いつもの光景だ。

「助かったよ、シスター」

彼女の名はシスター・ノア。飾り気とは無縁な修道服を着ていると分らないが、彼女が聖女と呼ぶに相応しい清らかさと美しさを持っていることを俺は知っている。帝国の野蛮な兵士たちから守ることができてよかったと心底思う。

「どうしたの？ また敵が来てたの？」

「ああ、そんなところだ」

「ありがとう、それにごめんなさい。あなたにそんな危険なことばかりさせて」

「気にするな、俺にできることはこの程度だ」

戦争で親を亡くした孤児がここには大勢いる。そして今後も増えるだろう。

俺には孤児たちの悲しみを癒やしてやることはできない。ただ、守ることはできる。少なくとも、子供たちが立派に成長するまでは。かつて彼女に——シスター・ノアにそうしてもらったように。

俺はふと孤児院を見上げ、全てが始まったあの日のことを思い出した。

もはや正確な年数は覚えていないが、俺が初めてここにやってきたのは恐らく一〇〇〇年以上、下手をすれば数千年前だ。実感はまったくないが、尋常ではない年数だ。

だが遠いあの日のことだけは昨日のことのように鮮明に思い出せる。誰も発見に至らなかった時空の精霊クロノスと契約を交わし、ここへ帰ってきたあの日のことを——。

序章 《過去転移》

そのとき俺は、流星雨で満たされているかのような奇妙な空間にいた。

星のような光がいくつも上から下へと落ちていく。ただし地面は存在せず、俺の体は浮いていた。《靈魂化》^{れいこんか}して異界に来たためだ、別に物理的に浮いているわけではない。

そして俺の前に、彼女は現れた。まるで最初からそこにいたかのように。

「ジレン、久しぶりだね……と言った方がいいのかな？」

華奢^{かしゃ}な見た目は幼い少女のようにも見えるが、しゃべり方や雰囲気からはどこか中性的な印象を受ける。おまけにその体は不思議な光のヴェールに包まれており、まるで天使のようだ。

もつとも精霊である彼女に、性別という区別があるとは思えない。人間である俺の認識ではそのように見えるというだけだ。

どのみち、見た目はどうでもよかった。必要なのは彼女の力だからだ。

「一か月ぶりだな、時空の精霊。準備と覚悟はできた、今こそおまえの真名を教えてください、力を借りたい。俺は……過去に転移したい」

俺たち精霊使いは、異界に存在する精霊の真名を聞き出すことで魂と魂が結びつき、その力の一端を行使用^{つかもち}することができ。《融合契約》と呼ばれる行程だ。

精霊は万物を司^{つかさど}ると言われている。ゆえに精霊使いたちの間では、ある推測があった。精霊が万物を司るなら、時を司る精霊もまた存在するのではと。

だが時の精霊を見つけた者は今まで誰もいなかった。考え方が間違っていたのだ。時ではなく、時空。そこにヒントがあったのだ。

「いいとも、じゃあキミにボクの真名を教え、過去に転移してあげよう。ただ前にも話したと思うんだけど、《過去転移》にはいくつもの制約を伴う。いいんだね？」

「分かってる、問題ない。俺の考えている通りなら、俺は召喚術を極められるはずだ」
召喚術を極めるには膨大な時間がかかる。通常なら何代にもわたって精霊使い同士で婚姻を繰り返し、子に力を引き継がせる必要があるからだ。

だがもし過去へ転移できるのなら、俺一人でも強大な力を手に入れられるかもしれない。そのためにこそ、俺は時空の精霊を探し出したのだ。

「念のため言っておくけど、キミは若返るわけじゃないんだよ？　あくまで今の姿形のまま過去に転移するだけだ。それでもいいのかい？」

「ああ。俺の目的は幼いころの俺自身を教育することだからな」

「分かった。じゃあ《過去転移》に伴う三つの制約について説明しよう」
「必要ない。前に会ったときに聞いただろう」

「そうはいかない、これはボクの義務だからね。理解してもらえなくてもいいけど、ボクにとっては昨日も明日も同じモノなんだ。だから都度説明しないとまずいんだよ」

確かに理解し難い話だった。だが、義務と言われては仕方がない。

「まず一つ。キミが過去に転移したとしても、歴史に大きな影響を与えることはできない」

言いながら時空の精霊は、指を一本立てた。

「理解できなくてもいいけど、キミが存在する世界の時間は一本の線でできている。過去を改変すれば、その瞬間未来にも影響が出る。だから《過去転移》してなにか行動したとしても、それが歴史に多大な影響を与えると判断されれば、因果律によって修正されることになるんだ」

「因果律か。何度聞いても聞き慣れない単語だな」

「まあ神のようなものだと思うっておくといいよ。たとえばキミが過去に戻って有名な王を殺そうと矢を放ったとしよう。だけどそれが歴史に与える影響が大きい行為だと判断されれば、放った矢は因果律によって必ず外れる」

「理解してるつもりだ。ただし、明日死ぬ人物が今日死ぬぐらいの差は許容できるんだろう？」

「すべては因果律次第だよ。歴史に大した影響が出ないと因果律が判断すれば、どんな有名な王だって死ぬときは死ぬとも」

物騒な説明をしながら、時空の精霊は二本目の指を立てた。

「二つ目の制約。キミはキミが生まれる以前の時間には戻れない。過去に戻ってキミが親を殺し、キミが生まれない歴史になると、因果律にも修正できない矛盾が生じることになるからね」

「もつともだと思うが、一つ目の制約とかぶってないか？ 過去に戻って両親を殺そうとしても、因果律が修正しそうなものだが」

「その通り、理解が早くて助かるね。だけどたとえばキミの両親が、歴史になんの影響も与えないような僻地に住んでいたとしたら、因果律とて見落とすかもしれない。キミが生まれなくなる可能性を手っ取り早く摘み取るには、誕生以前に戻れなくするのがもっとも簡単な処置なんだろうさ」

「分かった、どのみち問題ない」

俺が生まれる以前の歴史に興味はないし、そもそも親の顔も名前も知らないので干渉し

ようがなかった。

「三つ目、最後の制約だ。一人の人間が過去に跳べるのは一度だけ。正確に言うと《過去転移》を行った時点で、キミとボクの契約は因果律によって強制的に解消され、ボクを感じすることは二度と不可能になる」

「精霊との契約が解除されるなんて話は聞いたことがない。それだけでも歴史が変わるほどの大事なんだがな……」

俺は苦笑しながら呟いたが、そもそも《過去転移》だって前代未聞である。なにがあつたっておかしうはなかった。

いずれにせよ、俺にとつてこれが最初で最後の過去転移となるわけだ。たった一度の過去転移で召喚術を極めるには到底時間が足りない。だがこれについても考えがある。上手くいけば回避できるかもしれない。

「そうそう、これは助言だよ。キミは過去の自分を教育したいと言っていたけど、過去の自分は絶対を守ることをオススメするよ。もし過去のキミが死んだ場合、キミは即座に消滅することになる。これは因果律による修正行動の一つだよ」

「過去の自分だ、言われるまでもなく守るつもりではいるが。じゃあ逆に、過去に転移した俺自身が死ぬとどうなる？ 過去の俺も消滅するのか？」

「そんなことはない。過去でキミが死んだとしても、その時点で歴史が確定するだけさ。世界は何事もなかったように続くよ」

不思議なものだ。俺が死んでも影響はなく、転移先の俺が死ぬと今の俺は消滅するといふ。それが歴史への影響を最小限にする方法なのだろうか。

「じゃあ説明はこれで終わりだ。心の準備はいいかい？」

「それはもちろんだが……いいのか？ 上位精霊であれば、戦って力を示さなければ真名は教えてくれないと聞く。誰にも発見できなかった希少な精霊が、それほど簡単に真名を教えてくれるのか？」

「もちろんだとも、ボクを発見できただけでキミにはその資格があるからね。大体、ボクが振るえる力は因果律が許す範囲に限られている。《過去転移》なんてボクにとつてはホコリを吹き飛ばすようなものだよ」

「分かった。なら真名を教えてくれ、俺と《融合契約》を」

「教えよう、精霊使い。ボクの真名は——クロノスだ」

真名、すなわち真の名前。俺たちの世界において、名前とは個人を識別する要素でしかない。だがこの異界において、真名を聞くことは魂が結びつくことを意味する。それゆえこの真名を聞き出すという行為こそが、俺たち精霊使いにとつての契約の儀式——すなわ

ち《融合契約》となる。

事実、クロノスという名前を聞いた瞬間、俺という魂が彼女と結びつく不思議な感覚があった。俺は思わず身構えた。《融合契約》を行う際には契約酔いという現象が起こる。精霊と魂が結びつくことにより、体の均衡が崩れることによる体調不良だが、命にかかわるほどの影響は大きい。

相手はまだかつて誰も契約したことのない精霊だ、どれほど大きな契約酔いがあるかと思ったが――俺の魂に大きな変化は感じられなかった。クロノス自身が言った通り、彼女の振るえる力というのは非常に小さなものなのかもしれない。

「さあ、これでキミは《過去転移》ができる。戻りたい時間を言うといい」

「……分かった」

なんとなく分かる。今の俺には過去に転移できる力があると。

俺は自分が生まれた日を知らない。孤児だったからだ。だが孤児として拾われた日なら分かる。

「戻るべき時間は今から一八年前。フェロキア暦二〇〇年、初春の月一五日の日の出だ」

「へえ、二〇〇年。分かりやすい節目だね。まあ人の暦なんてどうでもいい、じゃあ次に戻りたい場所を強く思い浮かべながら、ボクの真名を告げるといい」



「分かった。契約に応じ、力を貸してくれ。時空の精霊、真名クロノス」
 「いいとも、異なる世界の精霊使い。まあ好きにやってみるといいよ」
 クロノスは指をパチンと鳴らした。次の瞬間、俺の体は光に包まれた。足、手、胴、顔。すべてが白い光で塗りつぶされていき、そして――。
 俺は一八年前に戻った。

第一章 第一話 ジレンとジレット

気がつけば、俺は野原にぼつんと立っていた。
 「過去に来た……のか？」

ひとまず自分の体を見る。幸い、異常はない。衣服はもちろん、所持品――右手中指に付けた精霊使いの証たる魔晶片の指輪もだ。魔晶片の入手は難しくはないが、これがなければほとんどの召喚術が使えなくなってしまう。

未来から過去にモノを持っていくのは因果律の修正対象になるのではと心配していたが、この程度は誤差の範囲内ということだろう。一度の《過去転移》は許されることを考えれば、あり得る話だ。

問題は、精霊を実際に召喚できるかである。俺が初めて精霊と契約したのはフェロキア暦二〇七年だ。今が本当にフェロキア暦二〇〇年なのだとしたら、七年も先のこととなる。果たして過去に戻っても《融合契約》は有効なのだろうか。

俺は魔晶片の付いた指輪を大地に向けた。大地を媒体に《精霊召喚》を試みるのだ。大地の精霊ノームは俺ともっとも相性のいい精霊であり、本来ならその召喚は容易のはずで

ある。

「顕現せよ、大地の精霊」

ノームとは種族名に過ぎず、召喚には精霊の真名が——正確には真名を知っていることが必要になる。俺は初めて契約したノームの真名、ダルという名を思い浮かべた。

心配は杞憂^{きゆう}だった。すぐにずんぐりとした小人のような大地の精霊ノームが現れる。試しにノームに命じて落ちていた石ころを飛ばさせてみた。なにも問題ない。

「やはり、精霊は俺たちとは異なる時の流れを生きているのか」

それは昔の有名な召喚士が、精霊の口から直接聞き出した言葉だ。精霊は異なる次元——異界からこの世界の万物を司^{つかさど}っており、召喚士はそんな精霊の真名を知ること魂同士が結びつき、力を行使できる。

異界は時間の流れが異なっており、それを裏付ける現象も確認されていた。たとえば精霊には老いも若きも存在しないし、先祖代々一〇〇年以上に亘^{わた}って契約を引き継がれてきた精霊もいるという。

つまり俺の契約した精霊であれば、過去に転移しても俺との繋^{つな}がりには失われない。想定していたことではあるが、実証できると安堵^{あんど}できる。

「となれば、次にやることは……」

状況を把握しようと周囲を見回す。太陽の位置から、まだ日の出の時刻ということは分かる。ふと見れば、寂れた農村があった。見覚えがあった。当然だ、俺は七歳になるまであの農村の外れにある孤児院で育ったのだから。

「うあああああん！ ああああああん！」

そのとき、赤ん坊の泣き声が聞こえた。

ふと声のした方を見ると、布にくるまれた赤ん坊が転がっている。

「おまえが俺なのか？」

育ての親から聞いたところによると、俺は赤ん坊の頃、孤児院の近くに捨てられていたという。その情報が正しく、また時空の精霊クロノスが忠実に契約を実行したとすると、この赤ん坊こそ俺ということになる。

俺は恐る恐る赤ん坊を抱きあげた。まだ首もすわっていないので、俺の腕に赤ん坊の頭を載せるようにしてゆつくりだ。こうなることを想定して練習しておいてよかった。

赤ん坊の頃の俺がどんな見た目をしていたかなんて分からないが、間違いなく俺だという気がする。精霊使いには《精霊感知》という相性のいい精霊を探し出す術がある。そのためか、この赤ん坊の魂も、俺との相性がいいという気配を感じるのだ。自分でもまったくよく分からない未知の感覚だ。

一つ困ったことに、赤ん坊は一向に泣き止む気配がなかった。他ならぬ未来の俺に抱っこされているというのに。

「ちょっと、誰なのあなた!? その赤ちゃんどうしたの!? 泣いてるじゃない!」

俺が困り果てたそのとき、突然人の声がした。思わず振り返った俺は驚くことになる。よく知った人物がいたからだ。修道服に身を包んだ少女だ。頭巾で髪まで覆っているが、俺が見間違えるはずもない。シスター・ノア。すぐ近くにある孤児院で孤児の世話をしていた人物——ようするに俺の育ての親だ。

このときはまだ一〇代後半ぐらいのはずである。にもかかわらず、俺が最後に見たときと同じ容姿だったので見間違いようがない。昔から歳を取らない人だと思っていたが、本当に今も昔も変わらない。いや、俺は過去に來たのだから今も未来も変わらないと言うべきか。

「ああ、すまない。ここに孤児院があると聞いて來たんだ。この赤ん坊は——俺の友人の子でな」

俺は内心の驚きを押し隠し、用意していた作り話を口にした。

「友人はこの子を俺に託して亡くなり、どうしようかと途方にくれていたんだ。金は払うし、俺も手伝う。この子を育てるのを手伝ってくれないか?」

「なにそれ。ちょっと待って、いきなり事情が深すぎて戸惑うんだけど」

もつともである。だが俺は知っている。シスター・ノアは子供に弱い。俺が抱えている赤ん坊の泣き顔を見れば、拒否できないのは分かっていた。

「ああもうっ、いいからその子貸して! すごい泣いてるじゃない!」

「もちろんだ」

俺はシスター・ノアに赤ん坊の俺を手渡した。

「なんてちっちゃなお手々。ほら、もう大丈夫よ」

まるで今後の未来が分かっているかのように。

赤ん坊の俺は、シスター・ノアの腕の中で泣き止むと無邪気な笑顔を向けた。そんな赤ん坊に優しく笑顔を返すシスター・ノアの横顔は、まさに聖母のようである。

「わたしの名前はノアよ。この子の名前は?」

「……名はまだないんだ」

ジレン、と教えるのは簡単だがあえて俺は黙っていた。俺の名はシスター・ノアに付けてもらった大事なものだ。俺に名を与えてくれるのは、いつもシスター・ノアでいて欲しかった。

「この孤児院で世話になるんだ、名付け親になってもらえないか、シスター」

「ちょ、ちょっと待って！ この子とわたしは今日初めて出会ったのよ？ いきなり名前を付けるだなんて、いくらなんでも責任重大過ぎるわ」

「別に問題ないだろう、他に名付けてくれる人もいないし。それに孤児院では珍しくないと聞けど、シスターが赤ん坊の名付け親になるというのは」

なおも言う、ようやくシスター・ノアは名付け親になる覚悟を決めたようだった。

「……仕方ないわね、分かったわ。じゃああなた、名前は？」

「お、俺の名前か？ 俺とその子は親子でもない、俺の名は関係ないだろう」

「だとしても、その子を救ったのはあなたよ。あなたにちなんだ名前にすべきだわ」

そのような展開になるとはさすがに予想外で、俺は必死でジレンにちなんだ偽名を考えなければならなかった。

「俺の名は……ジレッドだ」

「そう。じゃあこの子の名前は……ジレン。あなたは今日からジレンよ」

これも因果律の仕業なのかもしれない。赤ん坊の俺は、かつて俺がそうだったようにジレンという名を与えられた。



この農村——ラメルダ村には、アムリタ教の孤児院がある。正式名称を、大地の子の園^{グランド}というのだが、近隣の住人たちからはラメルダ孤児院と呼ばれていたらしい。

大地の子の園^{グランド}などという名とはあまりに不釣り合いな老朽化した孤児院だったし、なによりもラメルダ村自体、すでに誰も住んでいない無人の村となっていたからだ。シスター・ノアただ一人を除いて。

戦争のせいだ。今から一年前、つまり俺が生まれる前のフェロキア暦一九九年。隣国リンバル王国がロヴェエ^{ロヴェエ}レ帝国の侵攻を受けた。それだけなら隣国同士が戦争してるだけの他人事^{ひとごと}だが、このグラストル公国はかつて帝国の属国であつたにもかかわらず、今はリンバル王国と同盟関係にある。

いつリンバル王国の味方をするかもしれない裏切り者のグラストル^グ公国^{コク}を、帝国は放置しなかった。軍勢こそやってこなかったものの、考えようによってはそれ以上の最悪の状況に陥った。

水源を——帝国領から流れるデナール河の流れを変えられてしまったのだ。

この辺り一帯に流れ込む水量は激減し、人々の生活は大打撃を受けた。ほとんどの農業は天水で賄われていたが、多くの用水路や貯水池も枯^{かわ}渇し、一部では井戸まで干上がってしまった。また河は大事な流通網であり、流れる水は水車を動かす動力源ともなる。それ

らの多くが失われては、この地で生きていける人の数は極端に減る。

グラストル公国には単独で河を奪還できるだけの力もない。結果としてこの辺りに住んでいた人々のほとんどは、他の土地へ移った。残ったのは行くアテもない、あるいは他の土地へ移る余力もない人々だけである。

このラメルダ村は、その影響を受けた村の一つだ。村を流れる小川はとうの昔に干上がり、井戸の水位も大きく下がった結果、住人たちはすべて逃げ出し、残ったのはシスター・ノアただ一人だった。

シスター・ノアが残った理由は二つ。彼女自身もこの孤児院の出身であり、故郷を捨てられなかったこと。そして多くの人が逃げ出すような土地だからこそ、子供を保護する場所が必要だと考えたからだ。困窮した農民が子捨てに及ぶことは珍しくないのだから。

事実、赤ん坊の時に捨てられた俺は彼女によって救われることになるし、この後、別の孤児が孤児院の前に捨てられ、シスター・ノアに拾われることになる。もっとも、その子はシスター・ノアの懸命な看護の甲斐なくこの世を去ることになるが。

住人が逃げ去った農村には財貨の類はまったく残っていなかったが、畑や家具はもちろん、多少の食糧も残っていた。それに孤児院が属するアムリタ教の信者も、定期的に物資を持ってきてくれた。それがためにシスター・ノアとかつての俺はこの地で暮らすことが

できたのだ。

もっとも、その陰にはシスターの膨大な苦勞があったことを俺はあらためて知ることとなる。

「不安だわ。これぐらいの赤ちゃんに本当に必要なのは母乳や綺麗な水よ。この村の水はアテにならないし、ミルクや薄めた麦粥でちゃんと育てられるかしら……？」

俺が知っているシスターは、子供のためならいつも気丈に振る舞う人だった。だが今、過去の俺——ジレンの寝顔を見つめているシスターは、不安を隠そうともしなかった。涙さえ流しそうだった。俺の育ての親がこんな顔をすることもあったんだと驚いたぐらいだ。

「大丈夫、この子はきつと立派に育つさ」

俺はただ事実を口にした。前の世界において、離乳食もまだ食べられない赤ん坊の俺のために、シスター・ノアはあらゆる手を尽くしてくれた。山羊のミルク、果汁に重湯。少しでも俺に栄養を取らせようとしてくれた結果、俺は生き残ったのだ。

とはいえ、毎日のように成長する赤ん坊にとつて、栄養が重要であるのは間違いない。赤ん坊のときに十分な栄養を取れなかったこともあってか、俺は小さいころから今に至るまで細身で、シスター・ノアによく「ごめんなさい、お腹一杯食べさせてあげられなく

て」と謝罪されたものだ。あれは堪えた。シスター・ノアが一生懸命だったことを知っていたからだ。

だから、俺は早速未来を変える行動を始めた。

「清潔な水なら任せてくれ」

俺は水の精霊ウンディーネを召喚した。空気中の水分を水に変えて容器に注ぐ。二、三人が一日に必要な量の水ならどうか作り出せるのだ。

それに俺は《過去転移》するにあたって、あらゆる財産を処分し、持てるだけの財貨を持ってきていた。どうやらその程度の財貨を未来から持つてくることは因果律も許してくれたようで、すべて手元に残っている。その金を惜しみなく使った。遠くの町まで出向いて芋や野菜、果実を購入し、乳母まで雇った。ジレンのためだけではない、シスター・ノアにも少しでも美味しいものを食べてもらい、楽をして欲しかったからだ。



「あらまあ、ラメルダ村の孤児院にまだシスターが残ってるって話は聞いてたけど、孤児までいたとはねえ。おっぱいなら任せときな」

俺が雇った乳母は豪快で体も大きい三〇ほどの女で、まさに母乳が有り余ってるという

印象だった。実際その効果は抜群で、数か月が経過した頃には、過去の俺——ジレンは乳児期を乗り切り、でっぷりと太ってシスター・ノアを笑わせ俺を心配させたほどだ。

「あはは、見てよこの腕、ぶにぶに。よく育ったもんね、あれだけ飲めば当然だけど」

「だ、大丈夫なのか？　こんなにぶくぶくになっちゃって」

俺の疑問を笑い飛ばしたのは乳母である。

「ハイハイを始めてやすぐ元通りになるさ。これだけ大きくなりやもう大丈夫だ、乳母の役目もう終わりだね」

彼女の指摘通り俺の心配は杞憂に終わり、すぐにジレンは標準的な赤ん坊の体型に戻っていった。間もなく乳母との契約も無事終わり、三人で過ごす日々に戻った。



「ありがとう、ここまでジレンを育てられたのはあなたのお陰よ」

乳母が帰って行った日の夜、シスター・ノアはジレンに麦粥を食べさせながらあらたまったように口にした。

「礼なんか要らない。ジレンと一緒に育ててくれてるだけで俺の方が感謝したいぐらいだ」

「いいのよ、それがわたしの役目なんだから。でも……わたし一人じゃきつと無理だったわ。子供の面倒を見るのも、この孤児院を維持することだって」

それは前の世界では聞いたこともない、彼女の弱音だった。

実際のところ、彼女にはできることを俺は知っていた。シスター・ノアはたった一人で俺を育て、孤児院をギリギリまで維持したのだから。

だが表に出さないだけで、内心では苦勞していたのであろうことは容易に想像がつく。だから俺は言った。

「ああ、できる限りのことはする。なんでも手伝わせてくれ」

「……そう。あ、ありがとう」

俺は小さい頃からシスター・ノアに甘えてばかりだった。物心つく頃にはむしろシスター・ノアに頼られたと思うようにもなったが、一〇代の子供にできることには限界がある。

だがこの世界では俺の方がシスター・ノアより年上で、彼女が俺を頼ってくれる。《過去転移》した俺の目的は召喚術を極めることだったが、彼女の力になれることは純粹に嬉しかった。

もちろん、本来の目的についても成果が出始めていた。ある日、俺はシスター・ノアに

次のような指摘を受けることになる。



「ジレッド。あなた最近なんだか体が大きくなってない？ 初めて会ったときと比べてたら

一回りは大きくなってると思うんだけど」

「……やっぱりか」

俺の体はこの数か月で成長していた。わずかに背が伸び、以前と比べて疲れにくくなつたし、なによりも骨が太くなったという実感もあった。

別に体を鍛えていたわけでもなく、成長期もすでに終わっていることを考えると、今これだけ自分の体が成長する理由はない。理由があるとすればそれはたった一つ。

歴史の改変が行われたのだ。

本来の歴史であれば、俺は母乳の代わりに山羊のミルクや麦粥でかろうじて生き残ることとなる。一方、この世界での俺は、有り余るほどの母乳で育った。毎日のように成長する乳児期において、この差が小さいとは思えない。過去の歴史が変わった結果、未来の俺に影響が出たのではないか。

別に俺は歴史に大きな影響を与える行動は取っていないし、そのつもりもない。それゆ

えに因果律の修正対象にもなっていないのだろう。
《過去転移》した意味は、すでに証明されつつあった。だがこれはほんの序盤である。本当の効果はこれから実現されるのだ。

第一章 第二話 変わる歴史

またたく間に二年余りの時が流れた。

我ながら一文で表すなら実に簡単だ。だがこの間、もちろん信じられないほど多くの出来事があった。

俺は赤ん坊の俺——ジレンを見守り続けた。それはまさに昼夜を問わず激務でもあった。赤ん坊の世話とはそれほど大変なもので、俺を一人で育てたというシスター・ノアがづくづく超人のように思える。

ただ、大変なだけというわけでもなかった。たとえば過去の俺がハイハイを覚え、立って歩くことを覚え、「じれっど、じれっど」と初めて俺の名を呼んだときの感動は筆舌に尽くしがたい。なんとも不思議な感覚だが、まるで父親になった気分だった。

また、大きな出来事もあった。

「ジレッド、大変よ！ 孤児院の前に、また捨て子が！」

ある日のこと、洗濯物を干しに外へ出たシスター・ノアは、生後間もない赤ん坊を連れ

て戻ってきたのだ。

子供が二人いれば一人は死ぬ時代であり、孤児院へ子を捨てるという行為は珍しくはない。ここは見捨てられた地であるがゆえにその頻度が少なかったただけだ。

そして俺は知っていた。その赤ん坊は死ぬ運命にあるということ。かつてシスター・ノアに聞かされたことがあったのだ、「あなたには妹分がいたのよ、ほんの数日ほどだったけど」と。俺の育った孤児院にはその子の墓もあった。

恐らくそれは因果律によって定められた運命だ、変えることはできない。だから俺は、弱った赤ん坊を見ながらシスターに言った。覚悟してもらうために。

「この子はもう泣く力もないほど衰弱しきっている。長くは持たないぞ」

「だとしても、見捨てることなんてできないわ。お願いよジレッド、力を貸して。なんとか助けてあげたいの」

シスター・ノアにそう言われたから——というわけでもない。

彼女に抱かれていた赤ん坊は、時折目を開けると助けを求めるように俺を見たのだ。試しに指を差し出すと、まるで助けを求めるように握り返してくるのだ。

それは人に頼ることでしか生きられない赤ん坊の本能なのだろう。つくづく、生物というのはよくできている。子猫や子犬がそうであるように、赤ん坊もまた庇護欲ひごよくのようなも

のを駆り立てるようにできているのだ。

ようするに、俺も見捨てられなかったのだ。赤ん坊が泣くのは元気の印だという。赤ん坊が笑えば周囲の大人も無条件に笑顔になる。だが弱り切って表情一つ変えられない赤ん坊を見ているのは辛い。なにかせずにいられなかったのだ。

因果律が定めた運命に、どれぐらい逆らえるかという興味もあった。かくして俺とシスター・ノアは、その赤ん坊を懸命に看護することとなった。再び町で乳母を雇い、医者に診せ、昼夜を問わず必死に容態を見守った。

驚くべきことに、効果はあった。孤児院に捨てられた名も知られぬ少女の生死など、因果律にとってはどうでもよかったのかもしれない。俺の知ってる歴史と異なり、赤ん坊は生き残ってシスター・ノアから名を与えられることとなる。

「あなたの名前はティアナよ。ジレン、仲良くしてあげてね」



ティアナという新たな家族が増えてから、三年が経たとうとしていた。

突然できた妹とも言えるティアナは、ジレンにとって格好の遊び相手でもあった。この頃にはティアナも走り回れるようになり、二人が仲良く孤児院の周辺を駆け回る姿を毎日

のように目撃することとなる。

このときティアナの扱いに一番困っていたのは間違いない。彼女が存在する歴史を俺は知らなかったし、こんなに小さな女の子と接するのも初めてだ。おまけに、ティアナはやたらと——お父さん子だったのだ。

「じれっど、いっしょがいい」

本能的に父親を求めているのかもしれない。二歳半ばになった頃には、そう言って毎晩のように俺の寝床へ忍び込んできたものだ。

なにせ可愛い盛り^{かわい}の二歳の女の子だ。俺に拒否できるわけもない。それに冬の間、ティアナは非常に温かく一緒に寝ると心地よかった。毎晩のようにおねしょされることだけは慣れなかったが。

それにティアナの生存という出来事は、ジレンにとっていい方向へ転ぶこととなる。

ジレンが五歳になったときのことだ。ティアナが転んで膝を擦りむいたとき、俺がウンディーネを召喚して治療してやったことがあった。「ありがとう、じれっど」と天使そのものの笑顔を向けてくれるティアナの横で、ジレンがこう言ったのだ。

「ねえ、ジレッド。ほくもジレッドみたいな精霊使いになりたいよ」

ジレンが召喚術に興味を持ったのだ。

必然と言えば必然である。もともと俺は七歳になる頃には召喚術に興味を持ち始めるのだから。だが元の歴史より二年も早く興味を持ったのは、ティアナの存在ゆえだろう。

もちろん、俺としては反対する理由はない。予定では元の歴史通り七歳になってから召喚術を教えるつもりだったが、本人がやる気になったのなら前倒ししたって構わない。俺はジレッドに予備の魔晶片の指輪を与え、召喚術の基礎を教え始めることにした。



「いいか、精霊は異界といって、俺たちとは違う世界にいる。干渉できる手はただ一つ、この魔晶片の指輪だ。魔晶片とはこの世界が精霊によって創られたときの名残だと言われている。魔晶片を通じて精霊の元へ赴き、魔晶片を通して精霊をこの世界に召喚する。それが俺たち精霊使いだ。もっとも、小さな魔晶片で呼び出せる精霊は下位精霊に限られるが」

「精霊使いになるには、自分と相性のいい精霊を感知するところから始まる。《精霊感知》と呼ばれる術で、これは感受性の高い子供の頃にしかできないと言われている。だからおまえはこれからしばらく、《精霊感知》の修行を積むんだ」

「精霊はどこにでもいる。森にも、風にも、大地にも。ただその存在は理屈で説明できるものじゃない。精霊の存在を感じできるかできないか、それだけが精霊使いになれるかどうかを決めるんだ。その適性があるのは一〇〇〇人に一人程度と言われている」

「精霊を探し出せれば接触してその真名を聞き出すことで、『融合契約』ができる。たとえば、俺が契約してるノームはダアルという真名を持っている。だが真名は知ってるだけじゃ意味がない、異界で精霊から真名を教えてもらおうという行為そのものが必要なんだ」

ジレンがその気になってくれたことが嬉しく、俺は遠慮なく必要なことを教えた。五歳の子供に理解できる話ではないかもしれない。だが、

「子供は五歳にもなったら自我も目覚めるし人の顔色だつてうかがうようになるわ。あなただの教えが無駄になることはないわよ」

シスター・ノアはそう言つて後押してくれたし、事実、ジレンは必死に理解しようとしていた。



未来から来た俺という存在や、ティアナが生き残つたためだろう、俺の知っている歴史とは異なり始めていた。ジレンが六歳になったとき、思いも寄らぬ事件が起こった。

それはジレンとティアナが外で遊んでいるときのことだ。孤児院の外からグウウという獣のうなり声が聞こえたのだ。

「ねえジレッド！今の……熊じゃない？」

「ま、まずい！」

シスター・ノアが言い終えるより前に、俺は孤児院を飛び出していった。寂れていようが農村に野獣が出るのは珍しくない。俺の顔色は蒼白そうはくだっただろう、もしジレンが熊に襲われるようなことでもあれば、俺の存在にもかかわる。なによりティアナとジレンの二人が怪我けがをするようなところは想像したくない。

「ジレン、こわいよう……」

「だ、大丈夫。僕がいるから……！」

外に出ると、予想通りの光景が広がっていた。恐怖で動けないでいるティアナを庇かばうように、ジレンが立っている。そしてジレンの視線の先には——大きな熊がいた。熊は滅多

に人前に姿を現さないというが、人間の子供は格好のエサに見えたのかもしれない、今にも飛びかかりそうだ。

「冗談じゃない！ 顕現せよ大地の精霊！」

二人を守るため、俺は慌てて土の精霊を召喚した。地面を隆起させて二人を守る《石の壁》という術を使おうと思ったが、距離があるため狙った場所に出せるか自信がなかった。やむなく、土の精霊に命じて石つぶてを投じる。

だがそれよりも早く、熊がジレンに飛びかかった。それにあの巨体では石つぶてを当てたぐらいでは止まらないかもしれない。俺は恐らく顔面蒼白になっていたに違いない。使える手が一切ないのだ。

「うわあああああ！」

ジレンが悲鳴を上げた。いや、違う、気合いを入れるために叫んだのだ。なんとかしようと思えば、本能的に両手を突き出す。

奇跡が起こったのはそのときだった。

ジレンが両手を突き出したのと同時に、地面が隆起した。突然岩の壁が地面から迫り出し、盾となって熊の進路を遮ったのだ。先ほど俺が使おうとした《石の壁》である。

熊は回避しきれず、硬い壁に顔をぶつけた。傷を負った様子はなかったが、あまりに



理解不能な状況に危険を感じたのかもしれない。そのまま逃げ去っていった。

「ジレン、今なにをしたんだ……!？」

俺は慌てて過去の自分に駆け寄った。別段怪我を負った様子はなく、その代わり疲れたように地面にへたり込んでいる。

「ねえ、今僕が使ったのって……ジレットと同じ、土の精霊の力だよね？」

「ああ、間違いない。一体どうして召喚術が使えたんだ？」

「わ、分かんないよ。僕にもジレットと同じことができたらティアナを守るって思ったんだけど」

「だからって、契約もしてないのに召喚術を成功させられるはずが……!」

それは精霊使いの歴史で言えばあり得ない話だった。相性がいい、もしくは何十年も使い込んだ精霊なら、召喚媒体や詠唱を省略して召喚することもできるという。だがそもそもジレンはいかなる精霊とも契約していない。

だが、先ほどジレンは間違はなくノームの召喚に成功していた。ジレンがへたり込んでいるのもそのせいだろう、召喚には精神力を消耗するからだ。

「……いや、そうか。考えられる理由が一つあったな」

《過去転移》してから六年も子育てに奔走していたので忘れていた。

答えは一つしか考えられない、ジレンが呼び出したのは、俺が契約したノームだったからだ。言い換えれば、俺が召喚できる精霊は、真名さえ知っていればジレンにも扱えるのだ。

実のところ、そうだろうと推測はしていた。《過去転移》した理由の一つだ。

まず精霊は時の流れさえ異なる異界の存在であり、契約さえしていれば過去に戻っても召喚できる。これはすでに俺自身で確かめたことだ。

また、時空の精霊クロノスはかつてこう言った。ジレンが死ねば俺は消滅すると。つまり、俺とジレンの魂は同一のものなのだ。そもそも魂というものがどういふものかは誰も知らないが、もし魂に固有の番号のようなものがあるとすれば、間違はなくジレンと俺の番号は同じになるはずだ。魂で精霊と結びついている以上、俺と同じ魂を持つジレンが俺の契約したノームを扱えても不思議ではない。

もつとも、未来に契約した精霊が過去の自分にも召喚できるとすれば、新たな疑問が生じる。たとえばある精霊使いが一〇歳のときにサラマンダーと契約したとしよう。だが契約した時期にかかわらず契約が有効であるならば、その精霊使いは一〇歳未満のときであってもサラマンダーを召喚できてしまうことになる。

もつとも、現実には無理な話ではある。真名が分からないからだ。

一方、ジレンは偶然ながらも俺が契約しているノームのダルという真名を知っていた。本来なら、真名は知っているだけでは意味がない。ただそれは他人同士の話であって、俺とジレンは同一人物なのだ。同一人物が真名を知っていれば、召喚が可能なのかもしれない。

「つまりジレンは、俺と契約してる精霊の真名を知りだけで、召喚が可能になるのか」

公になることはないだろうが、それは精霊使いの常識が変わった瞬間だった。

第一章 第三話 新しい日々

1

《過去転移》して六年目。フェロキア暦二〇六年の春。俺はシスター・ノアにある提案をすることになる。

「シスター。嫌だろうが、相談がある。みんなでの孤児院を出て引っ越したい」

それは《過去転移》する前から計画していたことでもあった。もちろんシスターは渋い顔をした。ここは彼女が生まれ育った孤児院であり、この孤児院を守るために彼女はたった一人で残ったのだから。

「どうしてそんなこと言うの？ あなたのおかげでこの孤児院も綺麗きれになったし、四人なら自給自足だってできるじゃない」

「いや、だから、そのな。俺の金がもう尽きそうなんだ」

シスター・ノアは豆を投げつけられた鳩はとのような顔をした。

「お、お金……。そうよね。この六年、あなたに頼りっぱなしだったし……」

「街へ行こう、そうすれば俺も召喚術で働ける。それと、別の理由もあるんだ。ジレンとティアナに外の世界を見せてやりたい。多くの人と接する機会もな」

ジレンとティアナのため——。そう言われれば、断れる彼女ではなかった。

「分かったわ、ジレンとティアナにはもっと友だちが必要だもの。いつまでもこんな僻地^{へきち}の孤児院じゃ可哀想^{かわいそう}よね……」

予想通りシスター・ノアは承諾した。こうして俺たちは長いときを過ごした孤児院を後にし、四人での旅路につくこととなる。

実のところ、引越しの提案をしたことには経済的な理由以外にも深刻な理由があった。フェロキア暦一九九九年から始まった王国と帝国の戦争は、七年が経った今も終結どころか泥沼化している。その結果、間もなく王国と同盟関係にあるこのグラストル公国にも帝国軍の軍勢が迫ることになるのだ。

帝国軍は、占領した領地に住む人々を奴隷として連れ帰ることで知られていた。そのため本来の歴史でも、もう少し後にシスター・ノアは孤児院を捨てて旅立つことになる。

俺という孤児を連れ、行くアテもない厳しい旅だ。シスター・ノアにはもうあんな苦勞をして欲しくない。帝国軍から逃げるためという理由で孤児院を捨てるというのも苦勞の決断だっただろう。だからこの歴史の中では、もっと前向きな理由で——ジレンとティア

ナの見聞を広めるためという理由で、今の内に引越しをして欲しかったのだ。

2

「ジレッド、新しいおうちってどんなところなの？」

このとき四歳になっていたティアナは、生まれて初めての引越しに不安そうだった。

「ああ、フィンポートってな。大きな街だ」

「やった！ 僕、前から街に行ってみたかったんだー！」

過去の俺であるジレンに不安そうなところはなかった。あるいはティアナを励ますためにわざと気丈に振る舞ったのかもしれない。

フィンポートは大きな交易都市だ。その中央には城壁に囲まれた区画もあり、城塞都市としても名高い。多くの人が集まった結果、今や城壁の外に作られた街の方が大きくなっているらしいが。

俺たちはそんな外周部の街に移り住むこととなった。これも《過去転移》する前から決めていたことだ。元の歴史において、俺とシスター・ノアが辿り着いた街がフィンポートであり、少なくとも俺の知ってる限りこの街が戦火に巻き込まれることはない^と知っていたからだ。



新しい生活が始まった。シスター・ノアは街の孤児院で働き、ティアナを含めたこの街の子供たちの世話することとなる。実は俺の知ってる元の歴史でも、シスター・ノアはこの街の孤児院で同じことをしていた。フィンポートの街へ来た理由の一つである。

一方、俺はジレンを連れ、街で精霊使いとして働き始めた。ジレンに間近で召喚術を使うところをできる限り見せてやりたかったのだ。

土の精霊を使った土木工事、水の精霊を使った汚水の浄化、変わったところでは火の精霊による公衆浴場の湯沸かし。およそ召喚士というのは働き口に困ることはない。そもそも俺が七歳のときに精霊使いを志した理由というのも、金を稼いでシスター・ノアの助けになりたかったからだだった。

一番金になるのは水の精霊による治療、《癒やしの水》という術である。怪我をした箇所を、水の精霊の力で作った水の膜で覆うことで治癒力を増すという術だ。外傷にしか効果がなく、また瞬時に完治できるようなものでもないが、少しでも怪我が早く治せるのなら——と需要が絶えることはない。俺は治療院に身を置かせてもらい、あるいは土木工事の現場に赴き日銭を稼ぎまくった。

「すごいや、お金がいっぱいだ」

稼いだ銀貨を見ながら、ジレンは言ったものだ。

「ジレッド、これでいろんなものが買えるんでしょ？ お願いがあんだけど」

「なんだ？ 欲しいものもあるのか？」

ここは商業都市だけあって、玩具や菓子おもちゃの類も多く売られている。小さな子からすればさぞ誘惑に駆られるところだろう。過去の自分に贅沢ぜいたくをさせるのもどうかという気はするが、たまには許容してもいいと思った。

だが六歳のジレンの返答は、思いもよらぬものだった。

「シスターにお土産買って帰ろうよ。お菓子とか好きな、シスターって」

「なるほど、それはいい考えだ」

シスター・ノアは一〇代半ばという若い頃からジレンとティアナの面倒を見、孤児院を切り盛りしてきた。菓子の土産ぐらい、安いものだ。

「……いや、待てよ。そういうことならもつといい土産がある」

「え？ なになに？」

「服だ、服。たまにはもう少しお洒落しなれな格好でもするべきなんだ、シスターは」

商業都市だけあって、この街を行き交う若い女性は皆どこか洒落た服を着ている。一方、シスター・ノアは飾り気もないつぎはぎだらけの修道服を着、頭巾で頭のほとんどを覆い隠している。

「それいい考えだよジレッド！ シスターの服ってばろぼろだし。でもジレッド、お洒落ってどういう服のことなの？」

「……それは難しいな」

洒落た服を買う。それは俺にとって凄まじく難度の高いことだった。店員に言われるがままに買ってもいいが、せっかくの贈り物を他人任せにするのもどうかという気はする。

「そうだな、じゃあティアナに選んでもらおうよ。女の子同士なら分かるんじゃない？」

「おいおい、ティアナは四歳だぞ。いくらなんでも——」

否定しかけた俺は考えをあらためた。そもそもシスターに服を贈ることには一つ問題がある。彼女は質素を好むのだ。「こんな服買うお金があったら孤児院に寄付でもしてよ！」などと言われるのは目に見えている。それを阻止するには、ジレンとティアナを巻き込むのが一番だ。

「よし、ティアナを迎えに行こう」

こうして俺とジレンは孤児院に寄ってティアナを連れ出すと、店を探し歩くこととなる。

そしてこのとき俺は一つだけジレンとティアナに条件を出した。用意した服を手渡すのは、俺がシスター・ノアと二人きりのときに——という条件で。



「はあ!? わたしに新しい服!? 要らないわ、そんなお金があるなら孤児院に寄付でもしてよ。わたしにはこの修道服があるし」

翌日。俺から新しい衣服^{ひしやうふく}一揃いを手渡されたシスターは、俺の予想通りの言葉を口にした。とても贈り物を喜んでいるようには見えない。ジレンとティアナには外出しておいてもらって正解だった。

それに俺も、こうなるからこそあらかじめ反論を用意しておくことができた。

「予想通りの反応だな。だから言っておく、これは俺が金を稼いでジレンとティアナが選んだ服だ。実はティアナにも服を買ってやってな、おそろいの服でおまえと一緒に外出できるのを楽しみにしてるんだぞ」

「な、なにそれ……。卑怯^{ひきやう}だわ、そんなこと言われたら拒めないじゃない」

こうしてまんまとシスター・ノアを言いくるめると、彼女を着替えさせることに成功した。

「き、着てみたわよ。これでいいでしょ？」

間もなくシスター・ノアは、ブラウスにリボンのような腰巻き、それにスカートという格好で俺の前に立った。どこか顔を赤らめながら。

「ねえ、どこおかしくない？ なにか言ってよ」

「……………」

俺は言葉を失った。

本音を言えば、無茶苦茶綺麗きれいだった。

もともとシスターは目鼻立ちが整っている方だと思っていたが、なにしろ体の線一つ見えない修道服と、前髪程度しか見えない頭巾のせいとか、およそ色気というものを感じたこともない。そういう意図で作られた衣装だから当然なんだろうが。

その彼女が、女性らしい服を着るとどうなるか。見間違えるほど綺麗だった。

四歳のティアナが選んだだけあってやや大人っぽさには欠けていたかもしれない。だがもともとシスターはエルフの血でも入ってるんじゃないかと思うほど、歳としを取る様子がない。なにせ俺が《過去転移》して一八年前に戻っても、シスター・ノアを見間違えることはなかったほどだ。

今の年齢はもう二〇代前半のはずだが、未だに見た目は一〇代の少女のようだ。だから



こそ、その服はよく似合っていた。

特にスカートから伸びる細い足、ブラウスの隙間から見える鎖骨など、普段見えていない場所が見えるだけで、妙に艶めかく見えてしまう。一際目を引かれたのが金色の髪だ。今まで彼女の前髪しか見る機会がなかったが、頭巾をしていないときの彼女の金色の髪は、少しくせはあるものの長く美しく、彼女がなにか動作を行う度、綺麗に波打った。

「ちょっと、なんで黙ってるの!? 不安になってくるんだけど!」

「……よく似合ってる。買ったかいたあった」

俺がようやくそんな言葉を選び出すと、シスターはどうにか平静さを取り戻した。ただし、顔を赤くしつつ。

「そ、そう。ならいいんだけど」

「よし、出かけよう。ジレンとティアナが待ちくたびれてるぞ」

「え!? こ、この格好で出歩けていうの!」

「当たり前だ、今更修道服で出たらティアナが悲しむだろ」

子供をダシに使いながら、半ば強引にティアナを連れ出す。

往來に出ると、予想通りの反応があちこちで見られた。

「ね、ねえ。なんだかすごい見られてる気がするんだけど」

(分かる)

道行く人たちが、チラチラとシスターを見るのだ。その気持ちはよく分かる、下町を貴族のご令嬢が歩いているように見えるのだろう。近所の顔見知りさえ、彼女が誰だか咄嗟に分からなかったほどだ。

チラチラ見るだけならまだいい方で、少しでも俺がシスター・ノアから離れると、途端に見知らぬ男が彼女に声をかけるので、俺はあやうく街中で召喚術を使うところだった。

「もうイヤ。帰ったらすぐ着替えるからね!」

気疲れしたらしい彼女がそう愚痴り始めるのは当然だった。しかし、

「シスター、似合ってる!」

「シスター、きれい!」

彼女の姿を見たジレンとティアナは当然のように大喜びし、そのときだけはシスターも「ありがとう、二人とも」と素直に喜んだ。

「ティアナも可愛いわよ。いい服を買ってもらったのね、ジレッドにお礼言っときなさい」

「うん! ジレッド、ありがとう!」

ティアナの着ている服はシスターとはほぼ同じ意匠で、大きさが子供用というだけだった。

シスターの美しさを引き立てたその意匠は、ティアナが着れば年相応の可愛らしさと純真さをより強調した。こうして二人が揃うとまるで二輪の花が咲いているかのようだ。

つい俺は誘惑に駆られ、また子供たちをダシにしてシスターにある提案をせずにはいられなかった。

「こんなに子供たちが喜んでくれるんだ、俺やジレンたちと出かけるときぐらいはその服を着てくれ」

「……分かったわ、そのときだけね」

なにかものすごい特権を受け取った気がした。

俺が《過去転移》したのは召喚術を極めるためだったということを、思わず忘れそうになったほどである。

第一章 第四話 召喚術の訓練

1

この街に来て、もちろんただ働いていただけではない。日々の生活が安定すると、俺はジレンに本格的な召喚術を教えようとした。

「やった、本当!? 僕なんでもやるよ、教えてジレット!」

そのことを伝えるとジレンは飛び上がらんばかりに喜んだものだ。

「そんなに嬉しいか? 召喚術を学ぶことが」

「うん! 今度は僕が召喚術でお金を稼いでシスターやティアナに贈り物をするんだ!」シスターのために働きたいという動機は立派なものだ。だが俺は羞恥で顔が熱くなるのを感じていた。完全に昔の自分と同じことを言っているからだ。召喚術を一通り学び終えれば、今度はより召喚術を極めたいと言い出すようになるだろう。まったく、多少の齟齬^{そご}はあっても文字通り歴史は繰り返すものらしい。

それから俺は、ジレンと共に街を出て近くの森へと向かった。人目を避けるためだ。ジ

レンは真名さえ教えれば、俺と契約した精霊を召喚できる。そういった事情を他人に知られることは避けたかったのだ。

「さて、ジレン。俺たち精霊使いは三つの技を使う。覚えてるな？」

「うん。《精霊感知》と《靈魂化》と、魂を結びつかせる《融合契約》でしょ？」

「そうだ」

異界に存在する相性のいい精霊を《精霊感知》で探し出し、自らを《靈魂化》、つまり一時的に精霊と同じ存在になることで接触する。そして精霊の真名を知ることによって魂を結びつかせるのだ。

「おまえはどういうわけかもうノームを召喚することができる。だとしても、《精霊感知》が一番重要であることは変わらん。《精霊感知》こそ召喚士の基礎だし、感受性の高い子供のうちにしかできないことだからだ」

それが一代では召喚術が極められない理由だ。たとえば、俺が召喚術を極めようと志したのは一〇代半ば。だがそのころには、俺に精霊を感知することは難しくなっていた。二〇代、三〇代になればいよいよ新たな精霊と契約することは至難になるという。

「おまえに魔晶片を預けてから一年が経つ。精霊の存在は感じ取れるようになったか？」
「うん、多分。地面の中に、いつもなにか存在を感じるようになったよ」

ジレンは事も無げに言っただけだ。《精霊感知》ができるのは一〇〇〇人に一人と言われている。《精霊感知》ができないゆえに、精霊使いになることを諦める例は珍しくない。もちろん、当然と言えば当然だ。俺も七歳のころにできたからだ。そんな俺の経験に基づく指導を受ければ、ジレンにできないはずがない。うらやましい話でもある。二〇歳を越えた今の俺には、もう新しい精霊は感知できないからだ。

「じゃあ今日は一歩先へ進める。次に必要なのは、おまえが一時的に精霊と同じ存在になることだ。つまり《靈魂化》だな。精霊と同じ存在になって、ようやく異界にいる精霊に会いに行けるようになる」

「そ、それが一番難しそうなんだけど。どうすればいいの？」

「指輪に付いている魔晶片だ。おまえが感じ取った精霊の元へ、魔晶片を通して移動すると想像しろ。自分の魂だけが魔晶片を通して精霊の元へ飛んでいくと考えるんだ。そして精霊の場所まで辿り着いたら、真名を覚えてくれるよう頼みこめ」

「ちょ、ちょっと難しくない!? 魂になって移動!? そんなことできるの!？」

「大丈夫だ、《精霊感知》の方がよっぽど難しい。おまえはすでに精霊を見つけた。その精霊を目印に、辿り着くことだけ考えるんだ。魔晶片の効果を信じる」

実のところ、俺のこの解説が正しいとは思っていない。もっと万人向けのやり方であ

るのだと思う。

だが俺にできたことはジレンにもできるはずでジレンにはこのやり方が適切に違いないのだ。

「異界で精霊に接触さえできれば、交渉次第で真名を教えてくれるはずだ。精霊の真名を教えてもらうことで、おまえと精霊は魂で結びつくことになる。これが《融合契約》と呼ばれる儀式だ」

「分かった。やってみるよ」

ジレンは追い詰められた表情をしていたが、俺は心配していなかった。未知の感覚で居場所を察知しなければならぬ《精霊感知》より、見つけた精霊の場所へ向かうという想像さえできれば可能な《靈魂化》の方が圧倒的に難度は低いからだ。

実際、ジレンはしばらく四苦八苦していたようだが、やがてその体が硬直した。《靈魂化》に成功したのだ。靈魂となったジレンが自分の肉体から抜け出し、異界にいる精霊の元へ向かったのだ。

もともと、ジレンが戻ってくるまでに大した時間はかからなかった。

異界と俺たちの住む世界とは、時間の流れが違う。《靈魂化》して異界に辿り着きさえすれば、ジレン本人の感覚ではどれだけ長い時間が経とうと俺から見ればほとんど時間

は経たない。

「できたよ、ジレッド」

間もなくジレンは目を開けて、静かに言った。いや、声は静かだったがどこか興奮を隠せないでいるのが分かる。

「ノームのドーリって言うんだって。力を貸してくれるって」

「それが真名と呼ばれるものだ。その名を知っていれば、もうおまえは精霊が召喚できる」

「ど、どうすればいいの!? 早くやってみたいよ!」

ジレンのはしゃぎぶりは、新しい玩具おもちゃを与えられた子供そのものである。俺も非常に覚えがあるので、見ていてなんとも恥ずかしい。

「いいから落ち着け。でないと——倒れるぞ」

「え?」

俺の言葉で我に返り——そして自覚したらしい。自分の体の不調を。

ジレンの体が崩れ落ちる。もともと俺は予想していたため、その小さな体を抱きかかえることは簡単だった。

「なにこれ? なんだか体がだるいよ……?」

「無理するな、契約酔いという現象だ。大地の精霊とおまえは魂で結びついた。そのせいで魂と肉体の均衡が乱れ、不調となって表れてるんだ」

「な、なにそれ……。ちゃんと治るの？」

「もちろん、数日休めばな。俺だって元氣だろう？ とにかく今日のところは帰るぞ」

言いながら俺はジレンをおんぶした。

「ちえっ、せっかく新しい召喚術が使えると思ったのに……」

「無理をするな、契約酔いは何人も精霊使いの命を奪ってきた重い病なんだ。いいか、向こう一〇年は絶対に大地の精霊と契約するんじゃないぞ。体の均衡が一気に悪化して、間違ひなく死ぬぞ」

「一〇年も……？ それじゃもう、新しい精霊と契約できないんじゃない……」

「そうだな。だが大地の精霊以外となら契約できる。まあそれも体調が戻ってからだが」

「わ、分かったよ……」

実際、欲に駆られて命を落とした精霊使いなんていくらでもある。その凄まじさをまさに今身をもって体験していることもあってか、ジレンは神妙に頷いた。

2

その日の夜。ジレンを家で寝かせた後、俺は留守をシスター・ノアに任せ、一人で夜の森へ来ていた。

「さて、これからが本番だ」

精霊使いが一代で強くなるには限界がある。

契約可能な精霊を探し出す《精霊感知》は、感受性豊かな子供のときしか使えない。おまけに契約酔いのせいで、よほど相性がよくない限り同属性の精霊二体以上と契約するのは命にかかわる。

だから精霊使いは《精霊感知》ができる子供のうちに、地水火風の精霊一体ずつと契約できれば一人前だと言われていた。中には特定属性の精霊と極端に相性がよく、一代でノーム三体と契約できるような精霊使いもいるそうだが、俺はそうではなかった。

俺が大地の精霊と契約できたのは七歳のときで、一二歳までに水と火と風、木の精霊と契約できたが、それ以後は一切新しい精霊と契約できなかった。俺がごく平凡な精霊使いであるといういい証明である。唯一の例外は時空の精霊クロノスだが、あれは特殊な例なので参考にしていいのかわからない。

しかし、《過去転移》という術が使えらるなら話はまったく異なる。

「ジレンが契約したノームは、ドーリという真名らしいな」

脳裏にその真名を思い浮かべる。異界において真名を教えてもらうことで、精霊と召喚士は魂同士が結びつき、初めて召喚術が行使できる。他人から真名を教えてもらったとしてもその精霊を召喚することはできない。そう、他人なら。

俺は魔晶片の付いた指輪を地面に向けた。地面を媒体に大地の精霊を呼び出すのだ。

「顕現せよ、大地の精霊、ドーリ！」

俺の目の前に、大地の精霊ノームが具現した。

「使えた、やっぱりか！」

ついでに俺が昔から契約していたダアルという真名を持つノームも呼び出してみる。こちらは扱いなれた精霊だ、すぐ俺の召喚に応じた。

同属性の精霊二体の同時召喚。ほとんどの精霊使いには不可能な技だ。

これが意味することは一つ。

俺が契約した精霊をジレンが召喚できたように、ジレンが契約した精霊を俺は召喚できるのだ。

精霊使いの歴史に残る大発見と言っている。もっとも、この発見を世間に公表するつも

りはなかったし、たとえ公表できたとしても他の誰にも実行はできないだろうが。

しかも、ジレンに生じたような契約酔いは俺には生じていなかった。ジレンと俺が同一の魂であれば、ジレンが《融合契約》したときに当然俺の体にも契約酔いの症状が出そうなものなのに。

だがそれも仮説は立てられる。精霊との契約は時間を越えて有効だとしても、契約酔いは一種の病気——つまり肉体的な失調だからではないか。

ジレンは今日ノームと契約した結果、契約酔い^{わすれ}を患った。だが契約酔いの初期症状は三日も寝れば大体治まり、一〇年も経てば完全に消え去る。

ジレンを母乳で育てた結果、俺の体にも即座に影響が出たように、俺という時間軸で見れば、ドーリという真名のノームと契約したのは一八年以上前のことになるのだ。契約酔いはその時間で解消され、大地の精霊と契約したという事実だけが残ったのではないかなにせ前例がなく、記録もない。だがそれ以外に考えられなかった。

「これならできる。俺は召喚術を極められるぞ……！」

第一章 第五話 二つを一つに

フェロキア暦二一五年になった。ジレンが初めて《融合契約》してから、九年もの歳月が流れたのだ。

それは俺が三三歳になったことを意味する。三〇歳になったばかりのときは、「三〇歳になったといっても大して変わりないな」などと思っていたが、この頃になると老いを意識せずにはいられなかった。

たとえば、一晩寝ても体力が回復しない。肉を食べ過ぎると胃がもたれる。未だに一〇代のような若さを保っているシスター・ノアがうらやましいと思えるほどだ。やはり彼女にはエルフの血でも混じっているとしか思えない。

ティアナは一三歳になった。歴史に与える影響は小さいと判断されたのか、因果律は本来死ぬ運命にあったはずの彼女の生存を未だ許している。

シスター・ノアに育てられたからだろうか、ティアナもまた美しく快活に育った。年齢が年齢だけに、「来年にでもウチの息子の嫁に」という求婚の申し出があったことは一度や二度ではない。もっとも、ティアナに求婚があった旨を伝えると頑なに拒否されたもの

だった。

「絶対にイヤ！ ジレッドもジレンもわたしがいないとダメなの！」

シスター・ノアは日中いつも孤児院で働いているし、俺もジレンもやることもある。結果的に、家事を担当するようになったのがティアナだった。まあ家事ができれば働き口もあるだろうし、俺やシスターも助かってるので異存はない。

最近ではティアナがいなくて家事が回らなくなっているのは事実だ。そのせいで彼女の嫁入りが遅れるようなことだけはあって欲しくない。まあそもそも——冷静に考えるまでもなく、ティアナを他の男にやるのも癪である。結局、すぐにティアナに結婚の話をするとはなくなってしまった。

ただ、一つ問題があった。精霊使いが二人いる我が家では、毎日のように風呂に入れるという庶民らしからぬ特権がある。それはいいのだが、ティアナが自分にできることを模索した結果、ある発想に行き着いてしまったのだ。

「ジレッド、お風呂入ろう！ 背中流してあげる！」

初めてそんなことを言い出したのは六、七歳ぐらいだったか。当時は可愛いものだと思つた。お手伝いだったのが、習慣というのは恐ろしいもので一三歳になった今もそれは続いている。さすがに俺の方が気恥ずかしい。嫁入り前の娘がやることではない。

一方、ジレンは一五歳になった。もう幼さは欠片かけらもなく、身長も急に伸びている。九年前に契約したノームもすっかり使いこなしていた。

「見てくれ、ジレッド」

その日も、森に連れ出された俺の目の前で、ジレンは《大地の一打》と呼ばれる術を使ってみせた。大地の精霊ノームによつて投じられた石が、木をへし折る。

俺より早く召喚術を学び始めてるので当然ではあるのだが、明らかに俺よりノームを使いこなすのが早い。どうやらごく小さい範囲でなら、歴史というものは結構簡単に変わってしまうものらしい。

「見事だ。もう威力だけなら俺と遜色ないな」

「そうだろ!? 俺もあれだけ練習したからな!」

この頃には地水火風の精霊と契約を成功させていたジレンは、すっかり一人前気取りだった。一人称も何時いつの頃からか「俺」になっていた。「あなたの影響を受けたからでしょ」とはシスター・ノアの指摘である。

実際、地水火風の召喚術が使えれば、一人の人間として生きていくのに困らない。ジレンも今やシスターに仕送りする立場だ。いよいよ昔の自分をそのまま見ているようで恥ずかしい。

だが精霊使いとして問題も生じていた。ジレンも年齢を重ねたためか、すでに新しい精霊を感知することはできなくなっていた。これはすべての精霊使いに共通することなので仕方ない。今こそ、《過去転移》に伴う最大の実験をするときである。



「ジレン。一五歳になった記念だ、贈り物がある」

ある日、俺はいつも召喚術の練習場として使っている街近くの森にジレンを呼び出した。

「ジレッドから贈り物なんてこの魔晶片の指輪以来だぜ? 一体なにをくれるんだ?」

当然ながらジレンはなに一つとして俺を疑うことなく、待ち合わせ場所に現れた。

「まあ慌てるな、少し説明が必要だからな。いいか、おまえが契約できたノームやウンディーネは、分類で言えば下位精霊と呼ばれる存在だ。下位がいるんだから、当然上位精霊もいる。だが上位精霊は、俺たちが持つてするような小さな魔晶片じゃ探し出せない」

「俺だって調べたよ。魔晶片が必要なんだろ?」

「そうだ。もっと大きな魔晶片、すなわち魔晶石は各国が厳重に管理しているせいで、おそれと入手できるものじゃない。もつとも、たとえば大地の上位精霊タイタンを感知するには、まず自分の魂を大地の属性に慣れさせる必要があると言われてるんだが」

「タイタンと契約したけりゃ、ノーム数体と契約を交わす必要があるってことだろ？ 無茶な話だよな、召喚酔いがある限り」

ジレンの言う通り、精霊使いが一代で上位精霊と契約するのは極めて難しい。ごく稀に特定の属性と非常に相性がよく、上位精霊と契約できる精霊使いもいるが、少数の例外に過ぎない。

「だが方法はある。精霊使いは一代ではなく、先祖代々何百年にもわたって召喚術を極めようとしてきた。実力のある精霊使い同士を結婚させ、生まれた子に親の能力を引き継がせる方法があるんだ」

「聞いたよ。親子で一緒に《靈魂化》して、子が親と《融合契約》を行うことで力を引き継ぐ……って話だろ？」

「その通りだ。精霊使いになって数年も経てばそれぐらい学ぶか」

精霊使いは魔晶片を使うことで、自分の魂を異界に飛ばすことができる。《靈魂化》と呼ぶ術で、ようするに一時的に自分を精霊と同じ存在にするのだ。

そして遠い昔、人間が《靈魂化》できる以上、人間同士の《融合契約》も可能ではないか——そう考えて実行した精霊使いたちがいたという。

最初は失敗した。精霊使いは自分と相性のいい精霊としか契約ができないように、他人

同士では効果がなかったのだ。だがすぐに、血の繋がりがあれば、最大で五割ほどの力を引き継がせられることが分かったのだ。

血の繋がりが。ようするに親子や兄弟であることだ。たとえば親であれば子に五割の力を引き継がせることができる。兄弟の場合はかなり特殊で、まったく引き継がせられない場合もあれば、かなりの割合で融合できることもあるらしい。

つまり夫と妻がそれぞれ一〇〇の力を持った有能な精霊使いであれば、その子に五〇と五〇、合計一〇〇の力を引き継がせることができる。その子が育ち、別の精霊使いと結婚すれば、さらに優秀な召喚士が生まれるという理屈だ。だからこそ歴史ある名門精霊使いの一族は凄まじい力を行使でき、世界中で貴族として重く用いられているのだ。長い歴史を持つロヴェール帝国などは、非常に強力な精霊使いを何人も抱えているという。

「この中に面白い事例があつてな。ある双子が《融合契約》を行ったんだ。その結果、どうなったと思う？」

俺の問いかけに、ジレンはキョトンとした。

「……どうなったんだ？」

「一〇割の《融合契約》が可能だったらしい。記録によれば、双子の弟が兄に対して《融合契約》を行った結果、兄はこの世から綺麗さっぱり消え失せたそうだ。だが、消滅した

兄の記憶を弟は完全に保持していたらしい」

一般人であれば信じ難い話だろう。だが何度も《靈魂化》と《融合契約》を体験してきた精霊使いなら別である。

当然、ジレンもその一人だ。精霊と魂で結びつくという意味をよく分かっており、だからこそ少なくとも「そんな馬鹿な」と一笑に付すようなことはしなかった。

「不思議だけど、精霊使いならそういうこともあるだろうさ。でもジレット、その話が俺への贈り物とどう関係あるんだ？」

「分からないか？ 贈り物は俺だよ。おまえに俺のすべてをやる。俺と《融合契約》するんだ」

「ま、待ってくれ！ どういうことだ、他人と《融合契約》はできないんだろ!? まさか、あんた……俺の父親なのか!? いや、シスター・ノアもティアナも俺とあんたがそっくりだってよく言ってたけど……」

「それはそうだな」

思わず笑ってしまった。この一五年、「あなたたち、本当に親子じゃないの？」という指摘を何度シスター・ノアにされたか知れない。当たり前だ、俺たちは同一人物なのだから。「俺とおまえは親子じゃない。俺はな、未来からやってきたおまえなんだ」

真実を告げると、ジレンは驚くでもなく先にはかんと口を開けた。

「み、未来？ そんな馬鹿な……」

「信じられないのも無理はない。とにかく《融合契約》してみればいい、それで俺の考えていることもすべて分かるはずだ」

「ほ、本気なのか!? もし仮に……仮にだけど、本当にジレットが未来の俺だとすれば、確かに魂の相性は良いどころじゃない、完全一致するはずだ。《融合契約》すれば本当に一つになるのかもしれない。ジレット、これはとんでもないことだぞ！ うまくいけば……召喚術を極められるかもしれない！」

最初は戸惑っていたジレンだが、次第にその顔が歓喜に染まり始めた。俺は思わず苦笑した。かつて時空の精霊の存在を知り、召喚術を極められるのだと思いついた俺と同じ反応だ。

「いや、でも……待ってくれ」

「ん？ どうした、躊躇する必要があるだろうか？」

「仮にあんたの考え通りだとすると、あんたは消滅するんだろ？ そんなことになったら……シスターやティアナが悲しまないか？」

「……痛いところを突くな」

確かにそれは気にならないと言えばウソになる。この世界でシスター・ノアと共に過ごした時間は一五年にもなるのだ。もとの世界では母親同然だった彼女だが、この世界では信頼できる相棒だった。苦労しながら一緒にジレンとティアナを育てたこと、彼女に綺麗な服を着せて共に街を歩いたこと、すべて今でも鮮明に覚えている。彼女になんの感情も持っていないわけではない。

「だが俺はいなくなるわけじゃない、記憶も能力もすべて若いおまえが引き継ぐだけだ。

大体、まだ歴史を確定させるつもりもない。これからまた別の歴史が始まることになる……と言っても分からないだろうが」

「……いや、分かるよ」

ジレンは静かに言った。

「ジレッドは過去に戻ったって言ったよな。そうか、それがジレッドの目的だったんだな。そうやって召喚術を極めようとしたんだ、さすが未来の俺だ。分かった、さつさと《融合契約》しよう」

まったく同じ人間だからか、あるいはこの一五年で信頼を得ることができたのか。俺の突飛な提案を、ジレンは受け入れた。

「よし、では始めるぞ。《靈魂化》だ」

俺とジレンは目を閉じた。まずは自身を《靈魂化》させる。つまり魂となつて異界へ赴くのだ。

俺にとっては久しぶりの《靈魂化》だが、感覚は体が覚えていた。指輪についた魔晶片を通じて、異なる次元に魂が飛ぶことを想像するのだ。

間もなく体の感覚がなくなつたような気がした。自分の体から抜け出すような感覚もあった。そして俺の感覚は異界に飛ぶ。

異界は不思議なところだ。色の概念もなく、明るさの概念もなく、物理的な距離の概念もない。自分の体や地面があると思えばある気になってくるが、ないと思えばない気になってくる。

だが感慨にふけっている場合ではない。《精霊感知》の要領で、すぐに何かの存在を感じた。この世界で誰よりも俺と相性のいい相手——ジレンだ。

（ジレン。俺の力をやる。受け取れ）

（……分かった）

俺とジレンが魂によつて結びつく——というより、ジレンが俺の存在そのものを吸い上げようとする。俺は抗うことなく、そのまま流れに身を任せた。

そして、俺は消滅した。

第一章 第六話 無限の成長

気が付けば、俺は森の中にいた。

《靈魂化》を解き、異界から戻ったのだ。

ふと見れば、近くに人一人分の衣服が落ちている。まるで着ていた人間が煙のように消えたかのように。

その衣服がジレッドのものであることは容易に想像がついた。

「成功したのか……」

俺は本当に一つになったのだ。

「俺は……誰なんだ？ ジレンなのか？ ジレッドなのか？」

自分と《融合契約》することが可能だとは思っていたが、実際に行うとどうなるかはさすがに想像がつかなかった。

とりわけやってみるまで分からなかったのは、俺の人格だ。

俺の人格は俺のままなのか、それともジレンとジレッドを足して二で割られたのか、そうだった俺は本当に俺と言えるのか。

だがやってみた今なら分かる。俺は俺だ。いや違う、ジレンもまた俺なのだ。俺と俺が融合したのだから、俺は俺なのだ。

今やジレンとジレッドという二人分の記憶は一つになっていた。その結果、行われたのは——脳による取捨選択だ。

たとえば誰だって今日の朝になにを食べたかぐらいは覚えていだろうが、一〇年前の朝になにを食べたかなんて覚えていない。人間には忘れていい記憶とそうでない記憶があるのだ。ジレンとジレッド、二つの記憶の中から重要なことだけが脳裏に残された——そんな感じだ。

そのせいか、今の俺には一五歳のジレンと三三歳のジレッド、併せて四八年を生きたような自覚はまったくない。むしろ三三歳のジレッドが一五歳になったという点で、脳も体も若返ったような気さえる。

厄介なのは、今の俺には二つの「最近の記憶」があるということだ。ジレンにとつての昨日と、ジレッドにとつての昨日はまったく同じ時間帯ということになる。だが時間的には同じであっても、俺の中では完全に別々の出来事として認識されており、大変ややこしい。

とはいえ「昨日なにを食べてなにをしたか」などという些細な記憶は、時間が経てば脳

により取捨選択されるだろうし、この戸惑いも今の内だけだろう。

「ようするに、俺は俺だ」

こうなったら戸惑っている場合ではない。今すぐにやるべきことを思い出す。

それは《精霊感知》を行い、時空を司る精霊クロノスを探し出すことだった。

もちろん、本来ならそれは不可能だ。《過去転移》を行った時点でクロノスとの契約は因果律によって断ち切れ、二度と探し出せないというのだから。事実、俺が《過去転移》して以降、クロノスの存在を感じできたことはない。

だが、今の俺はクロノスと契約したジレットではなく、この世界に元々存在したジレンである。クロノスを感じすることはできるはずだった。

そう考える根拠はある。思考実験として、仮に《過去転移》した瞬間に俺が死んでいたと考えてみればいい。俺という存在は《過去転移》したものの、誰にも影響を及ぼすことなく消滅したと仮定するのだ。

その場合、この世界のジレンは順調に成長し、やがて歴史通り時空の精霊クロノスと接触を果たさなければならぬ。因果律が存在するからこそ、ジレンである俺がクロノスと接触できなければおかしいのだ。

「……見つけたぞ」

俺の考えは正しかった。ほどなくして、時空の精霊の存在を感じすることに成功したのである。あとは俺が《靈魂化》してクロノスの元へ赴くだけだったが、その前にすることがあった。

俺がただ召喚術を極めようとしていた頃のジレットであれば、そんなことはしなかっただろう。だが今の俺は、この世界で一五年を過ごしたジレットとジレンの一つになった姿なのだ。



「あら、ジレン。どうしたの？ こんな時間に」

俺が向かったのは、シスター・ノアのいる孤児院だった。

子供たちの世話というのは本当に大変で、彼女は今日も子供たちの夕食を作るために大量の食材と格闘していた。

そして、無言で俺は彼女を抱きしめていた。

「ちょっと、どうしたの？」

彼女は動揺一つ見せなかった。

「なにか嫌なことでもあった？ 昔みたいになでなでして欲しいの？」

温和な笑顔さえ浮かべて言う。それは完全に子供に接する保母の仕草だ。今の俺はジレンドではなく、彼女に育てられた一五歳のジレンなのだから当然だろう。

「いや、なんでもない。驚かそうと思ったただだよ。それよりティアナを探してるんだ。どこにいるか知らない？」

「この時間なら外よ。洗濯物を取り込んでるんじゃないかしら」

「分かった、ありがとう」

いつも通りのシスターだった。どうせならジレンではなくジレッドとして、彼女と最後の別れを済ませるべきだったと少しだけ後悔する。どうせすぐまた会えることになるのだが、少なくともこの世界で共に過ごしたシスター・ノアとはもう二度と会えない。そう考

えるとやはり寂しくもあった。

そしてもう一人、俺がどうしても会っておきたかった人がいる。シスターの手伝いのためこの孤児院に来ていたティアナだ。

「あ、ジレン。どうしたの？ いつもより早いよ？」

孤児院の傍で、大量の洗濯物を取り込んでいたティアナを見つけることは容易だった。

ジレンとしての俺がこの世界で長い時間を共にしたのが彼女だった。本来は死ぬ運命にあった彼女は、今の今まで生き抜き——そして美しく成長していた。ジレンという俺が好



きになるぐらいに。

だから俺は、無言で彼女を抱きしめていた。

「な、なに、どうしたの!? そういうのは夜に……」

「すまない、ティアナ。しばらく会えなくなるからこうしておきたかったんだ」

「え、どういこと!? 嫌よ、会えなくなるなんて!」

「大丈夫、ティアナにとっては一瞬だ。でも俺は……二年は会えなくなるから」

それは不思議な感覚だった。ジレンとしての俺は当然のことをしてるだけだ。だがジレツドとしての俺が、驚きを隠せないでいる。

俺は、いや、ジレンはティアナのことが好きだったのか——と。

恐らくこの違和感は当分消えないだろう。なにせジレツドにとってティアナは娘のようなものだったし、そもそも色恋沙汰にも疎_とかった。

「じゃあ、またな」

これ以上戸惑うティアナを見ていたくはない。俺はこの場で《靈魂化》し、時空の精霊の元へと向かった。



「やあジレン。まさかまた会えるとはね」

一五年前とまったく同じ不思議な空間で、その少女のような見た目の不思議な精霊と再会する。正確に言えば初対面ということになるのだろうが、前に出会ったという記憶がある以上は、再会と呼ぶべきだった。

ただし、一五年前と異なっているところがあつた。見た目だ。一五年前は幼い少女のような外見だった彼女が、今はティアナと同じぐらい——一二、三歳ぐらいに成長しているように見える。

「久しぶりだな、クロノス。一五年ぶりだからか? 見た目が成長してるようだが」

「成長というのはおかしいね、ただの気まぐれさ。ボクにとっては昨日も今日も明日も同じものだけど、キミにとってはずいぶん久しぶりの再会だろう? だから少し成長した外見になってみてあげただけだよ。もっと大人っぽい方がよかったかな?」

「いや、正直なところ見た目なんてどうでもいいが」

俺の本音に、クロノスは笑った。

「あはは、そう言うと思ったよ。キミが召喚術のこと以外にそれほど興味はないというのはよく分かったよ、ずっと見てたからね」

相手は時空を司る精霊である。俺のことをずっと見ているぐらいたやすいのだろう。

「なら話は早い。俺がここへ来た理由も分かっているだろう?」

「もちろん。また《過去転移》したいんだね? でも《過去転移》は一人一回だけだって言っただろう?」

「ああ、確かにそう言われた。だが《過去転移》したのは未来の俺であって、今このときの俺はまだ《過去転移》していない」

「確かに、キミの主観からすればその通りだ。ただね、結局のところは因果律がどう判断するか次第なんだよ、この意味が分かるかい?」

「なんとなくはな。因果律の判断によっては、俺の存在が消去されることがあってあり得るってことだろう?」

「その通り」

クロノスは俺の返答に満足したように微笑^{ほほえ}んだ。

「たとえばね、キミがもう一度《過去転移》したとしよう。転移先の世界には、もともとその世界に存在する赤ん坊時代のキミがいる。これをジレン1と呼ぼうか。そして、その世界には前回《過去転移》したキミ、つまりジレン2もやってくる。今のキミをジレン3とすれば分かるだろう、もしキミが《過去転移》を繰り返せば——」

その言葉の先は、俺にも分かっていた。

「一つの世界に三人の俺が存在することになる。それを因果律が許さないだろう? もしその方法が許されるなら、最終的に無限の俺が存在することになるからな」

「そういうこと。前に言ったかもしれないけど、ボクにとつて《過去転移》は大した術じゃない、息を吐いてホコリを飛ばすようなものだ。因果律が存在する限り、《過去転移》してもなにもできないしね。ただ、因果律が決して許さない《過去転移》もある」

「分かっているつもりだ。だから親殺しの矛盾に繋^{つな}がる《過去転移》や、無限にモノが増殖する可能性が生じることがきつと拒絶される」

「その通りだよ」

《過去転移》には制約があった。自分が生まれるより前には転移できず、そして《過去転移》できる回数は一人一度という制約が。それはすべて、因果律に支障が生じることを防ぐためのものだった。

「だからその対策は考えた。前回俺が《過去転移》したのは、フェロキア暦二〇〇年初春の月一五日の日の出の時刻だ。だからほんの数秒でいい、今回はそれより少し前に《過去転移》させてくれ」

「へえ。するとどうなるって言うの?」

「それなら過去の世界に存在するのは、赤ん坊——おまえの言うジレン1と、未来からや

ってきた今の俺——ジレン3の二人になる」

「でも、数秒経てば前回《過去転移》したキミ——ジレン2がやってくるはずだよ？」

「いや、来ないはずだ。俺の世界の歴史は一本の線で、過去が改変された瞬間に未来も変わるんだろう？　つまりジレン3である俺が《過去転移》した時点でジレン2が《過去転移》する未来は変わる。同じ人間が三人存在することは許されないだろう？　ジレン2、つまり前回の《過去転移》は因果律によって行われないことになるはずだ」

「面白い考え方だね。でもそれってジレン2の行為はすべて消滅し、歴史が改変されるってことだよ？　その場合、ジレン2の影響を非常に強く受けたキミがどうなるかは分からないよ？」

「そうだな。だがそう影響が出るとは思えない。ジレン3である俺がこれから《過去転移》しようとしている時間は、塗り替えられる以前の歴史だからだ。ジレン2の《過去転移》がなかったことになって改変される歴史があつたとしても、それ以前の時代にいれば関係ないだろう」

「そうか、色々考えてはいるんだね」

クロノスは一度頷いてから言った。

「一つ教えておくことがある。ボクは時空を司る精霊、つまり未来を知ることとは簡単な

んだ。興が削がれるから過程は見えないんだけど、キミが最後にどうなるかは知ってるんだ。教えてあげよう、キミの未来には——が待っている」

不思議なことが起こった。クロノスはなにかを口にしたが、その言葉が認識できなかった。言葉が聞こえなかったとか唇が読めなかったとかそういう類のものではない。ただ認識できないのだ。

「なんだ、今のは？　あえて口に出さなかっただけか？」

「違うよ、今のも因果律の修正なんだ。ボクが未来を教えれば、歴史に大きな影響が生じかねない。だからボクが誰かの未来を語ることは、因果律によって禁止されているんだ」

「……興味深い現象だな」

実のところ、散々クロノスが言及してきた因果律について、存在を実感することはなかった。なにせ死ぬ運命だったはずのティアナは生き残り、過去の俺の人生を変えられたりと、かなり好き勝手に過去を改変できてしまったからだ。だが目の前で実践されれば、否が応でも実感せざるを得ない。

「ようするに、キミにどんな考えがあるうと、《過去転移》に伴う制約は守った方がいいよ——としかボクには言えないんだ。たとえキミに消滅するような未来が待っていたとしても、ボクには決してなにも言えないし」

「心配は無用だ。おまえも言ってただろう？ 過去に戻って人を殺すことは、歴史に大きな影響をおよぼしかねないと。仮に俺が因果律に障害だと見なされたとして、俺個人を消滅させることが簡単だとは思えない。最悪でも《過去転移》に失敗するだけのはずだ」

「それだってキミの推測に過ぎないんだけどね。まあいいよ、どっちにしろキミの意志を尊重するだけだからね」

「ならあらためて頼もう。もう一度《過去転移》してくれ」

「いいとも。それじゃあ《過去転移》にともなう三つの制約について説明しよう」

「またか？ 今その制約についての話を散々やったところだろう？」

「何度も言うけど、これはボクにとつての義務だからね。《過去転移》の度に必ず説明する必要があるんだ」

「分かった分かった。仕方ない、最後まで聞こう」

クロノスの長い説明を最後まで聞き終える。

それは一五年前に聞いたのとまったく同じ内容だ。

「待たせたね、じゃああらためて契約しよう。ボクの真名はクロノスだ」

俺という魂が彼女と結びつく不思議な感覚が生じる。一五年前と同じだ。そしてやはり一五年前と同じように、《過去転移》すべき時間を口にする。

「戻りたい時間はフェロキア暦二〇〇年初春の月一五日。日の出より一秒前だ。契約に応じ、力を貸してくれ。時空の精霊、真名クロノス」

「いいとも、異なる世界の召喚士。運がよければまた会おう」

次の瞬間、俺の体は光に包まれた。足、手、胴、顔。すべてが白い光で塗りつぶされていき、そして――。



目が覚めたとき、俺はどこか見覚えのある野原にぼつんと立っていた。自分の体を見直す。なんにも変わりはない。所持品もだ。

ふと周囲を見回す。生後間もない過去の俺——ジレンが捨てられていた。まだ泣いてはいないが、それもすぐのことだろう。慌てて抱き上げる。

前の歴史であれば、もう既に一度目の《過去転移》した俺がやってきていた時刻。だが、今回はその気配もない。

「……成功だ」

前回の《過去転移》が行われた時間帯は修正が加えられた、あるいは削除されたのだろう。だが俺がこの世界に来たのは、修正が行われた時間帯の前である。因果律の修正対象

になることはなかったのだ。

つまり、《過去転移》を行い過去の自分を教え導き、そして一つになることを繰り返せばいくらでも精霊と契約できる。俺の考えは間違っていないかったのだ。

《なるほど、キミの見立ては正しかったようだね。これは興味深い》

「な、なにっ!？」

思ってもみなかった声が出て、俺は飛び上がりながらに驚かされる。

俺の視界に入ってきたのは——時空の精霊クロノスだった。

《おや、ボクの言葉が聞こえるのかい？ それはまた奇妙だね》

「な、なぜだ!? なぜおまえがここに!？」

《なぜもなにも、ボクは時空を司る精霊だよ？ どこにだって姿を現すことはできるとも、ボクがその気になればね》

「……………」

少しだけ冷静になった。時空、すなわち時と空間。この二つを超越できるなら、確かにどこにだって顔を出せるだろう。他の精霊と一緒にたに考えてはいけないのだ。

「だが、俺とおまえの契約は《過去転移》した時点で消失したはずだ」

《契約は関係ないよ、これはボクの趣味だからね。キミは初めて二度の過去転移に成功し

た契約者だから、ちょっと成り行きを見てみたいと思ったのさ》

クロノスにも趣味というか興味というものはあるらしい。

「それにしたってなぜおまえの姿が見えるんだ？ 召喚に失敗した精霊がこの世界で暴走することはあるが、勝手に出てきた精霊の姿が見えるなんて話は聞いたことがないぞ？」

《そうそう、実はボクもそれが疑問だったんだよ。ボクも様々な世界に顔を出したことはあるけど、こうやってボクの姿を見られたり、会話ができた精霊使いはキミだけさ。一体どういう理屈なんだろう?》

「……さあな」

考えればいくつかわかることはできただろう。だが今はその時間はなかった。

俺の腕の中で、ジレンが泣き出したからだ。前回の歴史通りである。

「悪いな、今忙しいんだ。そろそろシスター・ノアがやって来るからおまえと話してる暇はないんだ」

《ボクのことは気にしないでいいとも。どうせ時間はたっぷりあるんだ、またどこかで顔を出すからそのときにでも話し相手になってくれ》

そう言って、クロノスの姿はかき消えた。消えたという表現が正しいかどうかは分からない。

「まあいいか」

俺は気を取り直した。とにかく予想通り二度目の《過去転移》に成功し、こうして幼いころの俺に再び会えた。あとは再び過去の俺を精霊使いとして鍛えればいい。そうすれば今より多くの精霊と契約することができ、召喚術の真髄に一步近づけるのだから。

そして、間もなく前回と同じシスター・ノアの声が響き渡る。

「ちょっと、誰なのあなた!? その赤ちゃんどうしたの!? 泣いてるじゃない!」

もつとも。

ずいぶん後になって分かることだが、俺はこのとき勘違いをしていた。

なぜ俺が二度以上の《過去転移》に成功したのか。なぜ俺がどれだけ歴史に干渉するようなことをしても、因果律の修正対象とされなかったのかという、その真の理由を。

続きは、10月17日発売のファンタジア文庫で!

©Toru Shiwasu, Ruria Miyuki 2020